

2021年度 手話言語研究セミナー  
2022年2月13日



## 日本手話、台湾手話、韓国手話における言語変化 —数詞および親族表現に着目して—

外国手話研究部 / 国立民族学博物館  
相良啓子

## 研究の目的

1. 1900年代から1960年代までの日本手話と、現在使われている日本手話、台湾手話、韓国手話を比較して、数詞および親族名称における形の違いをまとめる。
2. 1945年以降、3つの手話言語がどのように変化したのかを明らかにする。
3. それぞれの変化について、現在の話者が使う語の地域差や年齢差を検証し、変化の全体的な流れを検証する。

### はじめに

## 1 研究目的と背景

### 2 研究方法

#### 文献資料とデータの収集

### 3 質的研究：数詞および親族表現における語彙の記述とその変化

- a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴
- b. 語彙の形の変化
- c. 意味の変化

### 4 量的研究：「10」「100」「1000」とその倍数

現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化

### 5 まとめ

本研究で明らかになった変化と学術的な貢献

## 歴史的背景

- 台湾（日本統治時代：1895年から1945年）
  - 1915年 台南盲啞学校
    - ← 大阪市立聾学校教員
  - 1917年 台北盲啞学校
    - ← 東京聾啞学校教員
- 韓国（日本統治時代：1910年から1945年）
  - 1913年 済正院盲啞部（ソウル）
    - ← 東京聾啞学校教員
  - 1944年 ← 大阪市立聾学校教員

## 歴史的背景



## 研究の方法（文献資料とデータ収集）

1. 文献資料：1902年から1960年代までの歴史的資料  
(旧〇〇手話：旧鹿児島手話・旧京都手話など)
2. 高齢話者が以前は使われていたとされる手話  
(古い〇〇手話：古い東京手話・古い大阪手話など)
3. 現在、話者に使用されている手話  
(現〇〇手話：現東京手話・現大阪手話など)

### はじめに

## 1 研究目的と背景

### 2 研究方法

## 文献資料とデータの収集

### 3 質的研究：数詞および親族表現における語彙の記述とその変化

- a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴
- b. 語彙の形の変化
- c. 意味の変化

### 4 量的研究：「10」「100」「1000」とその倍数

現在の日本および台湾における「たつ」の数の体系とその変化

### 5 まとめ

本研究で明らかになった変化と学術的な貢献

## 研究の方法（文献資料とデータ収集）

言語名	地域	使用年代	出典
旧鹿児島手話	鹿児島	1902年	佐土原 (1902)
旧京都手話 1	京都	1903年	京都市立盲聾院 (1903)
旧京都手話 2	京都	1903年 ～1920年代	新谷 (2011b)
旧東京手話 1	東京	1920年代前後	全日本ろうあ連盟 (1995) 全国手話通訳問題研究会 (1996)
旧東京手話 2	東京	1950年代前後	三島・金田 (1963)
旧大阪手話 1	大阪	1930年代前後	松永 (1937)
旧大阪手話 2	大阪	1950年代前後	松永・藤本 (1963)
旧大阪手話 3	大阪	1960年代前後	全日本聾唖連盟 (1969)
旧熊本手話	熊本	1960年代前後	新谷 (2011c)

## 研究の方法 (フィールドワークによるデータ収集)

### 1. 日本手話について

Sagara (2014) で収集した2012年~2013年の関東18人、近畿18人のデータに加え、2015年に東京で20名、大阪で15名から収集。他、2015年に、新潟、鹿児島、熊本、2016年に京都、2017年に、群馬、函館・札幌・旭川、山口でも収集。

### 2. 台湾手話について

2016年に台北で20名、台南で20名から収集。2018年台中で4人、台南で3名の80才以上の話者に対して追加のインタビュー調査。

### 3. 韓国手話について

2017年ソウルで6人、2018年に釜山で6名、済州島で4名からデータ収集。

はじめに

### 1 研究目的と背景

### 2 研究方法

文献資料とデータの収集

### 3 質的研究：数詞および種族表現における語彙の記述とその変化

- 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴
- 語彙の形の変化
- 意味の変化

### 4 量的研究：「10」「100」「1000」とその倍数

現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化

### 5 まとめ

本研究で明らかになった変化と学術的な貢献

## 研究の方法 (フィールドワークによるデータ収集)

※ いずれも、20代~80代と幅広い年齢層から収集

### 具体的なデータ収集方法

- スライドに示した語彙を手話で表してもらおう。
- 2名ずつ組みになってもらい、数合わせゲームや値段交渉ゲームなど、会話を基にしたデータ収集。

8	2	40	4
5	10	20	30



- アンケート調査 (話者の言語的背景を把握)
- インタビュー調査 (過去に使われていた表現など)

## 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

- 中和
- 簡略化および消失
- 融合
- 同化
- 両手化・対称化
- 中心化
- 語の入れ替え

## 数詞にみられる様々な表現とその変化

- 「1」～「9」
- 「10」とその倍数
- 「100」とその倍数
- 「1000」とその倍数
- 二桁の数：「11」～「19」、「21以上」
- 三桁の数
- 四桁の数

はじめに

### 1 研究目的と背景

### 2 研究方法

文献資料とデータの収集

### 3 質的研究：数詞および親族表現における語彙の記述とその変化

- a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴
- b. 語彙の形の変化
- c. 意味の変化

### 4 量的研究：「10」「100」「1000」とその倍数

現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化

### 5 まとめ

本研究で明らかになった変化と学術的な貢献

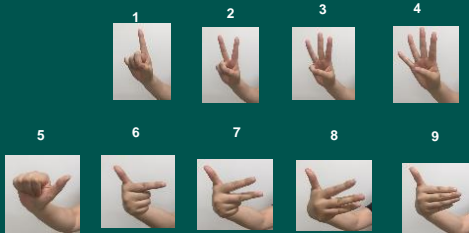
## 親族表現にみられる様々な表現とその変化

- 「男」「女」
- 「父」「母」
- 「兄」「弟」「姉」「妹」「兄弟」「姉妹」
- 「祖父」「祖母」
- 「息子」「娘」
- 「夫」「妻」
- 「伯父」「叔父」「伯母」「叔母」

## 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

1. 親指の中和 ----- 鹿児島の数詞「9」
2. 簡略化および消失
3. 融合
4. 同化
5. 中心化
6. 語の入れ替え

数詞 1-9: 現日本手話、現台湾手話、現韓国手話



日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

1. 親指の中和
2. 簡略化および消失 — 京都の「10」
3. 融合
4. 同化 — 京都の「10」
5. 中心化
6. 語の入れ替え — 京都の「10」

鹿児島の数詞「9」の表現




言語/地域	現標準日本手話	現鹿児島手話
語形		
音素表記	S <sub>[1234]</sub> (P-, →)	S <sub>[1234]</sub> (P-, →)
意味	「9」	「9」

数詞「10」: 現標準日本手話(i)、(ii)

	a.	b.
言語/地域	現標準日本手話(i)	現標準日本手話(ii)
語形		
音素表記	S <sub>1</sub> <sup>bend</sup> (P+, ↑)	P <sub>1</sub> S <sub>234</sub> (P+, ↑)
意味	「10」	「10」

※ 現台湾手話および現韓国手話でも同じ表現が使われている

## 数詞「10」: 旧京都手話 1、2 および現京都手話の「10」

	a.	b.	c.	
言語/地域	旧京都手話 1	旧京都手話 2	現京都手話	
語形				
音素表記	S <sub>1</sub> P <sub>53</sub> (P+, ↑)	S <sub>13</sub> S <sub>10</sub> (P+, ↑)	P <sub>51234</sub>	
調査年			2016年	

## 数詞「100」: 現標準日本手話 (i)、(ii)

	a.	b.
言語/地域	現標準日本手話 (i) 現韓国手話 現台湾手話	現標準日本手話 (ii) 現韓国手話 現台湾手話
語形		
音素表記	S <sub>1</sub> <sup>ft,up</sup> ; 0 (rf)	P <sub>512</sub> S <sub>45</sub>

## 日本手話系の言語における語の変化 の種類とその特徴

1. 親指の中和
2. 簡略化および消失 --- 東京の数詞「100」
3. 融合
4. 同化
5. 中心化
6. 語の入れ替え --- 東京の数詞「100」

## 日本手話系の言語における語の変化 の種類とその特徴

1. 親指の中和
2. 簡略化および消失 --- 大阪の「祖父」
3. 融合
4. 同化
5. 中心化 --- 大阪の「祖父」
6. 語の入れ替え

## 親族表現：「祖父」の表現

言語	現標準日本語
語形	
音素表記	S <sub>1</sub> <sup>tsuk</sup> tsuk <sup>tsuk</sup> B <sub>1</sub> <sup>tsu</sup> tsu (Pside, +); side1: ms_u
意味	「祖父」

言語	旧大阪手話 2	旧大阪手話 2	旧大阪手話 2
語形			
音素表記	S <sub>1</sub> <sup>tsuk</sup> tsuk <sup>tsuk</sup> S <sub>1</sub> (Pside, +); side2: f_m	DIH: S <sub>1</sub> (Pside, +); side2: f_m MOR: S <sub>1</sub> <sup>tsuk</sup> tsuk <sup>tsuk</sup> (p-, →)	DIH: S <sub>1</sub> (Pside, +); side2: ms_u MOR: S <sub>1</sub> (Pside, +); f_u
意味	「父方」	「の」	「祖父」

## 二桁の数の表現: 11-19



+



## 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

1. 親指の中和
2. 簡略化および消失
3. 融合 - 韓国手話の数詞「12」~「15」「17」~「19」
4. 同化
5. 中心化
6. 語の入れ替え

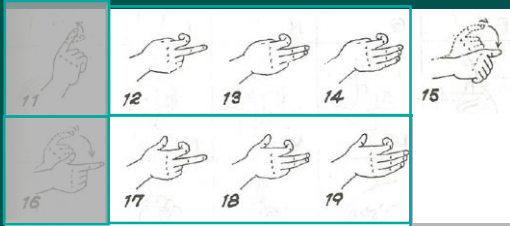
## 二桁の数の表現: 韓国手話の変化

### ふたつの形態素の融合

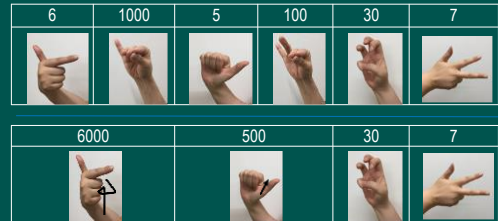


加算型から縮約型への変化

## 二桁の数の表現: 現韓国手話 (11-19)



## 四桁の数: 大阪の「6537」: 入れ替え



並べて表現する形 → 数詞抱合への変化

## 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

1. 親指の中和
2. 簡略化および消失
3. 融合
4. 同化
5. 中心化
6. 語の入れ替え — 大阪の四桁の教

### はじめに

1. 研究目的と背景
  - a. 研究目的と背景
  - b. 先行研究の問題点
2. 研究方法
  - a. 文献資料とデータの収集
  - b. 記述法
3. 質的研究: 数詞および親族表現における語彙の記述とその変化
  - a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴
  - b. 語彙の形の変化
  - c. 意味の変化
4. 量的調査: 「10」「100」「1000」とその倍数
 

現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化
5. まとめ
 





本研究で明らかになった変化と学術的な貢献



## 日本手話系の言語における「100」とその意味

語形	現日本手話	現台湾手話	現韓国手話
 P111S14	「100」 (基数・金額)	基数「100」	古い韓国手話 (a.) では、金額。 現韓国手話では、 「100点」(点数) 「100年」(時間)な どの特定の単位を表 す語にのみ使用され る。
 P111S14 photo	「100」 (基数・金額)	「100台湾ドル」(金 額)	

## 親族表現：韓国における「男」「女」

	1982	2017
男		
女		

## 親族表現：「男」「女」

	現日本手話	現韓国手話	現台湾手話
男			
女			

## 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴

1. 親指の中和
  2. 簡略化および消失
  3. 融合
  4. 同化
  5. 両手化・対称化
  6. 中心化
  7. 語の入れ替え
- ← 音声言語にもみられる変化
- ← 手話独自にみられる変化

- はじめに
- 1 a. 研究目的と背景  
b. 先行研究の問題点
  - 2 研究方法  
a. 文献資料とデータの収集  
b. 記述法
  - 3 質的調査：数詞および親族表現における語彙の記述とその変化  
a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴  
b. 語彙の形の変化  
c. 意味の変化
  - 4 量的調査：「10」「100」「1000」とその倍数  
現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化
  - 5 まとめ  
a. 本研究で明らかになった変化  
b. 今後の課題

## 現在の日本と台湾におけるふたつの数の体系とその変化：現日本日本手話

地域	数	出現頻度				合計 回数
		ゼロ系の表現		数詞抱合の表現		
		回数	%	回数	%	
近畿	10	80	58.3	43	41.7	103
	100	44	82.9	28	37.1	70
	1000	74	82.5	6	7.5	80
	合計	178		75		253
関東	10	0	0.0	27	100.0	27
	100	0	0.0	25	100.0	25
	1000	67	80.4	44	38.8	111
	合計	67		96		163
総計		245		171		418

## 現在の日本と台湾におけるふたつの数の体系とその変化

数詞抱合の表現

語形			
音韻表記	s <sup>10</sup> ts	s <sup>100</sup> ts (s(r))	s <sup>1000</sup> ts
意味	「10」	「100」	「1000」

ゼロ系の表現

語形			
音韻表記	p <sub>10</sub> s <sub>10</sub>	p <sub>100</sub> s <sub>10</sub>	p <sub>1000</sub> s <sub>10</sub>
意味	「10」	「100」	「1000」

## 現在の日本と台湾におけるふたつの数の体系とその変化：現台湾手話

		ゼロ系の表現		数詞抱合		総計 回数
		回数	%	回数	%	
		台南	「10」	16	18.0	
「100」	126		75.9	40	24.1	166
「1000」	57		64.1	32	35.9	89
合計	199		57.8	145	42.2	344
台北	「10」	0	0.0	92	100.0	92
	「100」	40	28.6	100	71.4	140
	「1000」	12	10.7	100	89.3	112
	合計	52	15.1	292	84.9	344

## はじめに

- 1 a. 研究目的と背景  
b. 先行研究の問題点
- 2 研究方法  
a. 文献資料とデータの収集  
b. 記述法
- 3 質的調査：数詞および親族表現における語彙の記述とその変化  
a. 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴  
b. 語彙の形の変化  
c. 意味の変化
- 4 量的調査：「10」「100」「1000」とその倍数  
現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化
- 5 まとめ  
本研究で明らかになった変化

## 参考文献

- 佐土原寸美 (編)  
1902 『聴覚教授手話法』鹿児島：私立鹿児島盲啞学校。  
新谷 薫博  
2011b 「京の指番号のルーツを探る (9) : 漢数字を考案した背景 (京の歴史探訪39)」『京都ろうあニュース』(448)2011年10月1日: 5, 京都: 京都府聴覚障害者協会。  
京都市立盲啞院  
1903 『盲啞教育論: 附・聾盲社会史』京都: 京都市立盲啞院。  
三島 二郎, 金田 高興  
1983 『日本手話図録—手まねのてびき』東京: 早稲田大学教育心理学研究室ろう心聴研究会。  
松永 博  
1997a 「聴覚手まね事典」『聴覚界』78: 123-126。  
全国手話通訳機関研究会  
2015 『手話への魅力あることば』手話通訳ビデオ演習シリーズNo. 9, 京都市聴覚言語障害センター。(財) 全日本聴覚通訳  
1969 『わたしたちの手話 (1)』東京: (財) 全日本聴覚通訳。  
(財) 全日本聴覚通訳 (発行), 米川明彦 (監修)  
2011 『新日本聴—手話辞典』東京: 中央法規出版。  
Segara, K.  
2014 The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross-Linguistic Perspective. Thesis for Master of Philosophy, submitted to the University of Central Lancashire.

## 本研究のまとめと学術的貢献

1. 日本手話系の言語の数詞および親族表現における記述およびその変化についてまとめ、音声言語に共通する変化、手話言語独自の変化があることを示した。
2. 数詞については、質的調査・量的調査を実施し、通時的および共時的なアプローチの双方から、変化の傾向を明らかにした。
3. 写像性が高いと言われている手話言語においても、使われていくうちに抽象化が進む。  
→ 恣意性の高低ではなく発達経緯の検証が大切!

2021年度 手話言語研究セミナー  
2022年2月13日



日本手話、台湾手話、韓国手話における言語変化  
—数詞および親族表現に着目して—

外国手話研究部 / 国立民族学博物館  
相良啓子